(19)日本国特許庁(JP)　(12)公開特許公報(A)　(11)特許出願公開番号
特開2005-279221
(P2005-279221A)
(43)公開日　平成17年10月13日(2005.10.13)

(51)Int.Cl.⁷	F I			テーマコード（参考）
A61H 39/06	A61H	39/06	321	4C101
	A61H	39/06	324	
	A61H	39/06	327	

審査請求 未請求　請求項の数 2　書面　（全 12 頁）

(21)出願番号　特願2004-129054 (P2004-129054)
(22)出願日　平成16年3月29日 (2004.3.29)

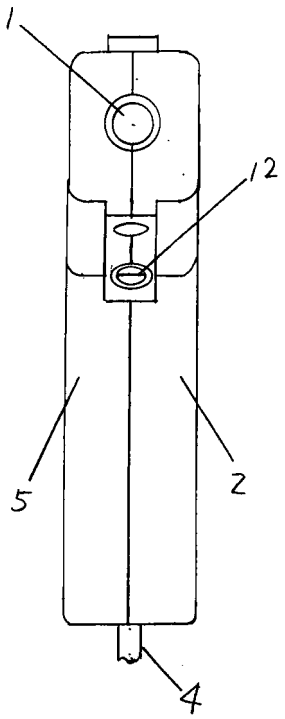
(71)出願人　393021037
有限会社太陽物産
長野県上田市緑が丘１丁目６番１６号
(72)発明者　小林　治雄
長野県上田市緑が丘１丁目６番１６号

Fターム(参考) 4C101 AA08 BA01 BC27 BD04 BD12 BE06 CA11 CB02 CB12 CC01

(54)【発明の名称】電熱式温熱指圧器

(57)【要約】　（修正有）

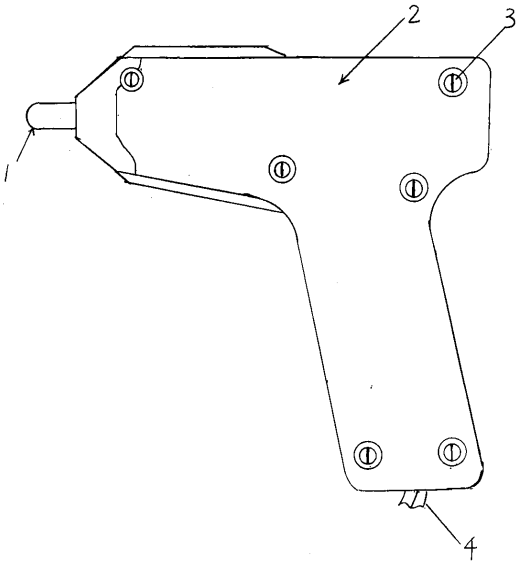
【課題】　従来の手で扱う指圧器具に、電熱によるお灸効を加えた器具を、安価な費用で利用者に提供したい。
【解決する手段】　肌が火傷をする程の温度でなければ、お灸の効果は生まれません。
肌が火傷をする程の温度の指圧棒を、直接人肌に触ることは出来ないから、肌に布を当てた上から指圧をするか、布や皮革やプラスチック等で作った、「図６と図８の符号２」の袋状の防熱キャップを、指圧棒に被覆をすることによって、指圧棒の先端「図７符号１」の部分が低温になり、最初に肌に触れる時は低温で軟らかい熱さが伝わり始め、直後から秒感覚で指圧棒の芯の熱が肌に伝わるので、皮膚にお灸のような熱さが伝わります。
指圧棒は、金属と耐熱プラスチックの二種の材質を組み合わせて作ってあり、二種の材料の配置と、それぞれの長さの調整で、発熱部から指圧棒の先端に伝わる温度の調整が出来ます。
【選択図】
図６　図７



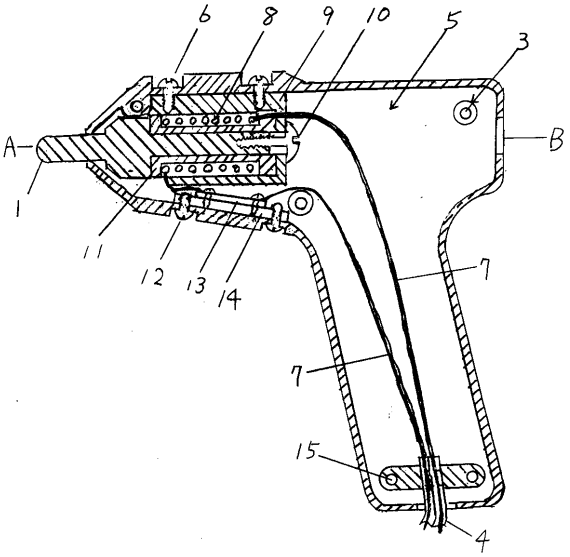
【特許請求の範囲】
【請求項１】
　電気ハンダこての、発熱部の発熱温度を１００度前後の発生に押え、こて先に相当する部分を細い直径の球面にして、人体のお灸を当てる部分に押しつけて、低温のお灸と指圧の効果を求める器具である。
　人体の保護のために、器具の発熱部分が過大な温度の異状を感知したら、電源を遮断する安全ヒューズを、発熱部に設置してある。
【発明の詳細な説明】
【技術分野】
【０００１】
　本器具は、電気ハンダこての、こて先の形状を、細い棒状に形成し、先端を球面に仕上げて、人体の指圧に対応する形状にし、発熱温度を１００度位に設定した、低温のお灸と指圧に使用する電熱式温熱器具である。
　人体保護の為に、器具の発熱部分が過大な温度の異状を感知したら、過大温度感知ヒューズが作動して、電源が切れる仕組みになっている。
【背景技術】
【０００２】
　従来の指圧器具は、突起物による指圧効果を得る器具であったが、本器具は、電熱を利用して、発熱部の先端の球面状の突起を身体の一部に押し当てて、指圧と温熱効果の両面を得る、電熱式温熱指圧器具である。
【発明の開示】
【発明の効果】
【０００３】
　指圧の効果に温熱効果を加えたものである。
【発明を実施するための最良の形態】
【０００４】
　人体に接触する部分は、電熱により非常に熱いから、薄い布を肌に当てた上から、温熱指圧をする。
　熱さの強弱の感覚は個人差があるから、肌に当てる布の厚さや、器具を押し当てる時間は、各人で調整する。
【課題を解決するための手段】
【０００５】
　自分の体調に合う自分の体のツボを、知ることが大切。
　モグサのお灸に近いように熱するには、本器具を長時間体に押し当て続けるか、同じ箇所を何回も押し当て続けるようにする。
【発明が解決しようとする課題】
【０００６】
　本器具を使い、簡便な熱源と操作で、温熱指圧が出来る。
【実施例】
【０００７】
　お灸の専門家に、自分に合った温熱の接点を教えてもらい、温熱点の部位のマークを付けてもらって、自分で温熱指圧のツボを憶えるようにすると、器具の使用効果が高くなる。
　接触部は熱いから、器具が体に接触する箇所に布を当てて、その上から温熱指圧をする。
　布の厚さで、初めに肌に感じる温度を調整して、そのまま指圧しながら自分の熱さの感覚で、温熱指圧器を肌から離す。
　温熱の感覚は人によって違います。体の前面は自分で熱さの調整が出来ますが、手の届かないところは、温熱指圧器を操作している人に、熱さの信号を送って、温熱指圧器を肌から離すようにする。

【発明の効果】
【０００８】
本発明により、火傷をしない程度のお灸の器具を、安全で使い勝手の良さと、安い価格で人々に提供して、指圧と軽いお灸の効果を得て戴ける効果がある。
火傷をするほどの熱さを我慢して、本格的お灸の効果に近づけたい人は、指圧時間を長くするか、同じ場所を繰り返し温熱接触または、温熱指圧をすれば、お灸の効果に近づきます。
【図面の簡単な説明】
【０００９】
【図１】ピストル型の温熱指圧器の外装２の側の側面図。
【図２】同上の上面図。
【図３】同上の外装５側の垂直断面図。
【図４】同上の「図３」のＡ－Ｂの水平断面図。
【図５】同上の底面図。
【図６】同上の正面図。
【図７】同上の背面図。
【図８】同上の温熱指圧棒の正面図。
【図９】同上の温熱指圧棒の断面図。
【図１０】同上の発熱コイルとボビン
【図１１】同上のコイルとボビンの収納ケースの立体図。
【図１２】同上のコイルとボビンの収納ケースの正面図。
【図１３】同上の過熱防止安全ヒューズと、シューズ取り付け台の上面図。
【図１４】同上の過熱防止安全ヒューズの立体図。
【図１５】同上の過熱防止安全ヒューズと、ヒューズ取り付け台の側面図。
【図１６】同上の過熱防止安全ヒューズ取り付け台の立体図。
【図１７】内容物が同上と変わらない、棒状の温熱指圧器の立体図。
【符号の説明】
【００１０】
１　温熱指圧棒
２　熱源格納容器２側。
３　熱源格納容器の２側と５側を、合わせて止めるネジ。
４　１００Ｖの電気コード。
５　熱源格納容器２に対向する側の、熱源格納容器。
６　コイルとボビンの収納ケースを取り付けるネジ。
７　１００Ｖ電気コードより、発熱源につながる耐熱コード。
８　発熱コイル。
９　発熱コイルのケース。
１０　温熱指圧棒を固定するネジ。
１１　発熱コイルのボビン。
１２　過熱防止安全ヒューズ台を止めるネジ。
１３　過熱防止安全ヒューズ。
１４　過熱防止安全ヒューズを取り付ける台。
１５　１００Ｖ電気コード固定板。
１６　１００Ｖ電源コード取入口。

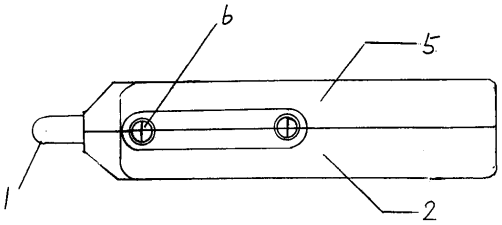
【図１】



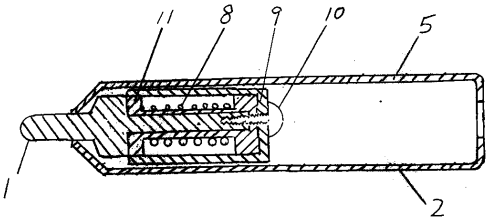
【図３】



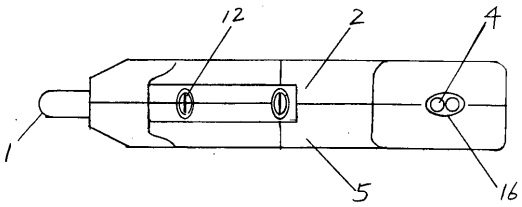
【図２】



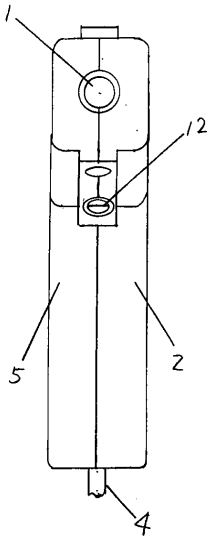
【図４】



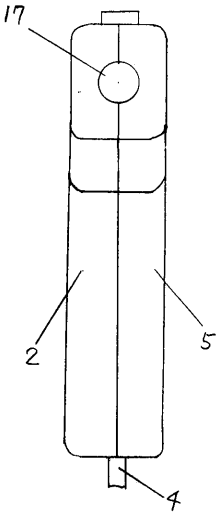
【図５】



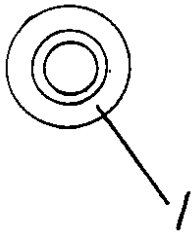
【図６】



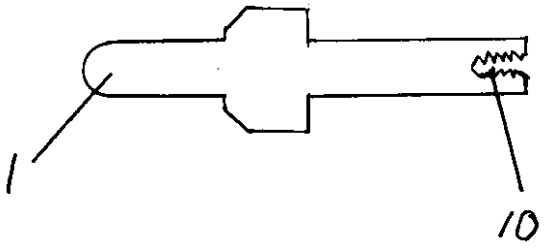
【図７】



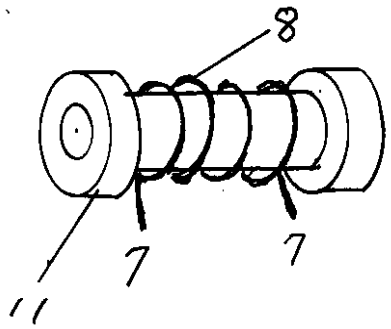
【図８】



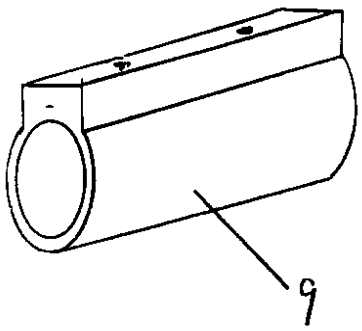
【図９】



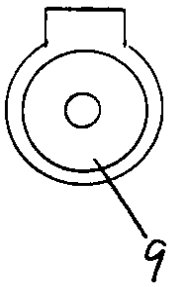
【図１０】



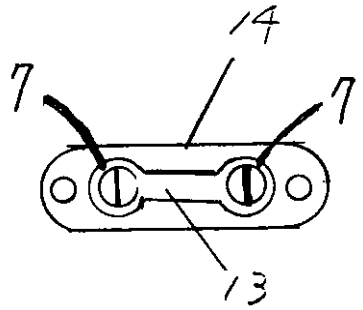
【図１１】



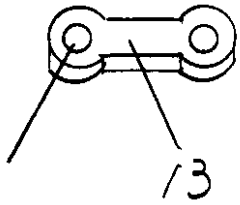
【図１２】



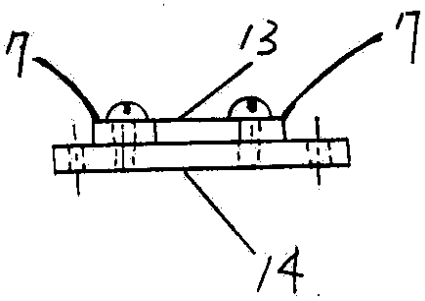
【図１３】



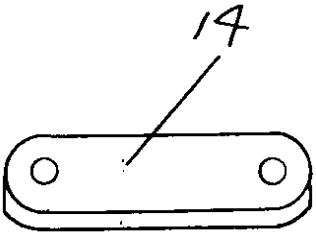
【図１４】



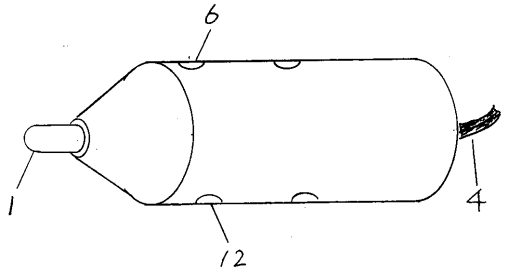
【図１５】



【図１６】



【図１７】



【手続補正書】
【提出日】平成16年9月13日(2004.9.13)
【手続補正１】
【補正対象書類名】特許請求の範囲
【補正対象項目名】全文
【補正方法】変更
【補正の内容】
【特許請求の範囲】
【請求項１】
　２００度以上に発熱する電気コテの発熱温度を、温度制御器を使って１００度位に押えて、コテ先に直径が６～８ミリで「図１０符号８、９、１０」の「指圧棒」を付けて、人肌の指圧やお灸を行なう部分に、布を当てた上から指圧を行なうか、または、「指圧棒」に布や皮革やプラスチックで作った防熱キャップ「図１と図８の符号２」を被覆して、この先端を人体に押し当てて、指圧と電熱のお灸を同時に行なう。
【請求項２】
　市場にある発熱温度が１６０度の安価な発熱器具を改良して使う方法。
　前項の防熱キャップの素材の厚さを厚くすれば、１６０度の熱でも指圧に使えないことはないが、高熱な指圧棒による火傷を避ける為に、直径６～８ミリ位の外径で、小穴が明いたネジ付きの金属棒を、発熱部のネジ穴にネジ込み、中間に同径の２５０度耐熱のプラスチック棒を挟み、先端は球面の金属棒にした、二種類の材質を三段に連ねた、指圧棒「図１０～１１符号８、９、１０、１３」に、前項同様に防熱キャップを被せると、発熱部の１６０度の発熱が、指圧棒の先端に到達するまでに、１００度位の温度に低下するので、指圧と低温のお灸を同時に行なう。
上記各部の長さや材質や配列順を変えることで、発熱部から指圧棒の先端に伝わる温度の調整が出来る。

この方法を使えば、高価な温度制御器は使わないで済みます。
１６０度の発熱器具の使用は、家庭用電気アイロン並の注意が必要です。
【手続補正２】
【補正対象書類名】明細書
【補正対象項目名】全文
【補正方法】変更
【補正の内容】
【発明の詳細な説明】
【技術の分野】
【０００１】
電熱で１００度位に熱せられた、棒状で先端が球面を持つ部分を、布や皮革やプラスチックで作った防熱キャップで被覆することで、人肌に接触する熱さが緩和されるので、被覆された棒の先端を身体の一部に押し当てて指圧をすれば、低温のお灸も同時に行える。
発熱温度が高過ぎる場合は、防熱キャップに布を重ねるか、指圧棒の材質や長さや組合せを変えることで、指圧棒の先端に届く熱を調整緩和することが出来る。
本器具を人肌に押し当てると、当初は弱い温感を皮膚に感じるが、秒感覚で器具内部の高温が、防熱キャップを通して徐々に肌に伝わり、やがて、肌が我慢出来ない程熱くなるので、指圧する本人の我慢度合いで、器具を体から離します。
この指圧によって、肌に真赤な焼け跡が残るほどの、熱の伝導があります。
【背景技術】
【０００２】
人肌をモグサで直に焼かない、間接的なお灸の器具の中で、低温お灸と指圧を同時に行なう器具を私は知りません。
私が本器具を考案した発端と理由は次の通りです。
私は２年位前から隔週にお灸をしていますが、お灸を旅先でも出来ないかと思って、ドリンク剤の空きビンを利用して、キャップの平面部に丸穴を明けて、先端が球面の真鍮の棒を取り付け、ビンにお湯を入れて棒を熱くして、お灸をする箇所に布を当てた上から棒で指圧をしたら、熱さと指圧でお灸に近い効果があったので、使い捨てた空きビンとキャップを利用した指圧器具を作れば、資源の再利用と安価な温熱指圧器具が作れて、世間に役に立つと考えました。
また、廃品のペットボトルの中に、電気による２００度の発熱器と、１００度に温度を設定する温度制御器「図７符号１９」を入れて、指圧棒の先端「図６符号８」に伝わる発熱を１００度に押えて、指圧実験をした結果、お湯の熱利用と同じ結果を得ました。
しかし、温度制御器の価格は、器具本体より高価に付くので、この器具を使わない方法を検討した結果、市場で１６０度の発熱機器で低価格の大量流通品を発見し、１６０度の熱源に接触する金属の指圧棒を三分割して、根元は金属、中間は耐熱１５０度のプラスチック、指圧棒の先端は金属で作り指圧実験をしたら、発熱部分の１６０度の温度が、指圧棒の先端に伝わる間に、１００度位の温度に下がったので、高価な温度制御器は不要になった。
本器具は、１６０度の熱を発生する部分があるので、アイロン使用並の注意が必要です。熱部の放熱、接触部の被覆、長時間使用禁止、等の対応が必要です。
確実な安全の為には、時間切れタイマーを使うことが望ましいです。
【発明の開示】
【発明の効果】
【０００３】
本器具は、従来より家庭で使われている間接のお灸器具より、器具代も消耗費用も安く上がり、お灸も指圧も同時に行なえる長所があります。
旅行に携帯しても、モグサのお灸のように、火や煙や匂いがなく安全簡便です。
【発明を実施するための最良の形態】
【０００４】

１６０度の温度を発生する器具を使う場合は、指圧棒の先端のみならず、器具の発熱部も覆うことで、器具の接触温度を低くします。

【課題を解決するための手段】

【０００５】

指圧棒の先端部や発熱部は熱くて、体に直接触れるることは出来ないから、防熱被覆「図６符号２と２１」が必要です。

電熱による発熱部には、火傷や火災を防ぐために、器具の温度が定温より上昇したら、電流が遮断される温度ヒューズ「図６符号２２と２３」の設置が必要。

温熱指圧を実行するとき、指圧棒が最初に肌に触れる時の熱さが強すぎると感じたら、被覆された指圧部の先端に、更に薄い布を重ねることによって、肌の接触温度を下げることが出来ます、

発熱部の熱が外装に伝わることを防ぐために、発熱部と外装の内側が接触する部分を、出来るだけ少なくして、発熱部の熱が外装に伝わることを、避けるようにする必要があります。

【発明が解決しようとする課題】

【０００６】

１００度位の発熱温度の器具に就いて、電熱器具の製造メーカー数社に電話で問い合わせたら、「発熱部が１００度位の電熱器は製造は出来ない。２００度発熱の電熱器を使い、発熱を１００度に調整する温度制御器を併設して、使用温度を１００度に下げる方法を取る」と返事がありました。

この１００度の温度を保つための、温度制御器の価格は高価で、全器具の原価が二倍以上になるから、原価的にこの温度制御器は使いで済ますことを考えた。

手段は、発熱部温度が１６０度の市販の器具を使い、発熱部から指圧棒の先端に伝わる温度を下げるため、発熱部と指圧棒の先端の間に、耐熱温度２５０度のプラスチックを挟んで、指圧棒の先端の温度を下げる方法を取り入れた。

分割されている指圧棒を組み立てるときは、耐熱接着剤を使用して、指圧棒の分断や、ネジの緩みを防ぐ必要があります。

【実施例】

【０００７】

器具から肌に伝わる熱加減、時間加減は、人それぞれに調整します。

肌に火脹れが出来る、モグサのお灸に近い熱を好む人は、発熱した器具を肌に押し当てる時間を長くすれば、肌に赤い焼け跡が残る程焼けますかすら、器具の接触時間を長くすれば良いです。

【実施例】

【０００８】

異なる材質で作られた指圧棒は、分離交換ができるから、指圧棒の先端に伝わる温度が異なる指圧棒を数種類用意して、各人が使い分ける方法が取れます。

【発明の効果】

【０００９】

本器具は、指圧と温灸の両用の効果を求められます。

本器具により、従来の火傷をしない程度のお灸をする器具の費用より、安価で長期使用が可能です。

火傷をする程の熱さを我慢して、本格的お灸の効果に近づけたい人は、火脹れが出来るほど指圧時間を長くするか、同じ場所を何度も繰り返し温熱指圧を行なえば、モグサのお灸の熱効果に近づきます。

【図面の簡単な説明】

【００１０】

【図１】ピストル型の温熱指圧器具の指圧棒に、防熱キャップを被せた正面図。

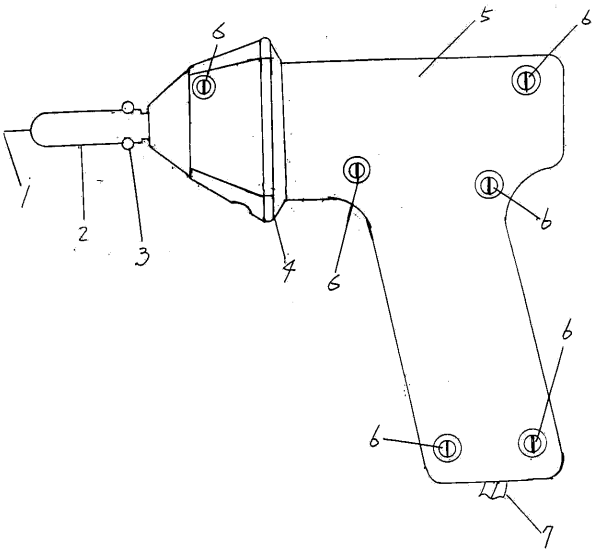
【図２】同上から防熱キャップを取った上面図

【図３】同上に防熱キャップを被せた底面図。

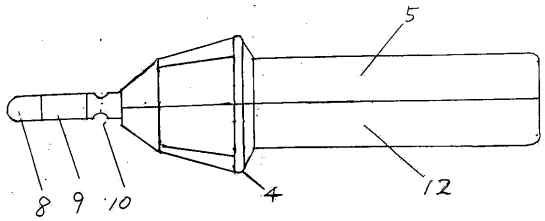
【図４】同上の左側面図。
【図５】同上の右側面図。
【図６】「図１」に防熱カバーを付けたＡ～Ｂ線の垂直断面図。
【図７】「図６」から、防熱カバーを外し、防熱キャップを被せたＡ～Ｂ線の水平断面図。
【図８】指圧棒の先端に被せる、布、皮革、プラスチック等で作った防熱キャップ。
【図９】発熱部全体に被せる、布、皮革、プラスチック等で作った防熱カバー。
【図１０】「図６符号８～９～１０」の指圧棒の立体図。
【図１１】同上を分解説明する断面図。
【図１２】一種類の材質で出来た指圧棒の立体図。
【図１３】二種類の材質で出来た指圧棒の立体図。
【図１４】同上を分解説明する断面図。
【図１５】発熱器が入った、発熱器の容器の立体図、
【図１６】同上の断面図。
【図１７】発熱コイル巻いた角筒に、温度制御器を挿入した立体図。
【図１８】温度制御器の立体図。
【図１９】温度ヒューズ部の立体図。
【符号の説明】
【００１２】
１　指圧をする接点。
２　指圧棒の熱を緩和するための防熱キャップ。
３　防熱キャップを止める耐熱ゴムリング。
４　発熱部との接触に距離をおくためと、防熱カバーを止める為の突起。
５　外容器。
６　外容器を止めるためのネジ。
７　電線コード。
８　指圧棒の先端部。
９　指圧棒の中間部。
１０　指圧棒の根元部。
１１　温度ヒューズを止めるビス。
１２　外容器、
１３　分断している指圧棒をまとめるネジ。
１４　発熱線を巻く容器。
１５　防熱カバーの折り返し部分。
１６　防熱カバーを縛る紐を通す穴。
１７　発熱部を入れる容器。
１８　発熱線。
１９　温度制御器。
２０　外容器内の熱を逃がす穴。
２１　発熱部を被覆する防熱カバー。
２２　温度ヒューズ取り付け台。
２３　温度ヒューズ。
２４　配線説明線。
２５　配線コードを固定するネジ穴。
２６　配線コードを固定する部分。
２７　防熱カバーの断面。
２８　金属、耐熱プラスチック材等、の一種類の材料で出来た指圧棒。
２９　指圧棒のネジ部が入るネジ穴。
３０　温度ヒューズの取り付け台を止めるビス穴。
【手続補正４】

【補正対象書類名】図面
【補正対象項目名】全図
【補正方法】変更
【補正の内容】

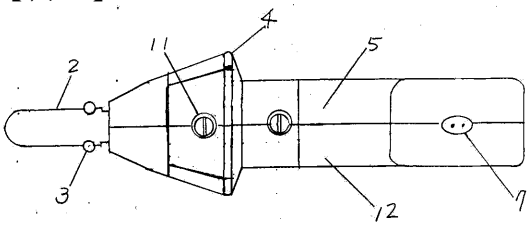
【図１】



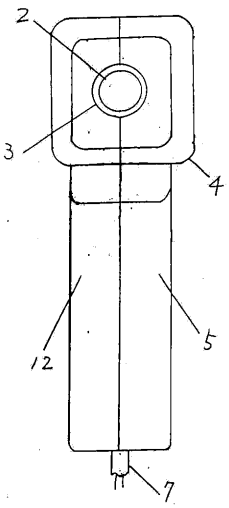
【図２】



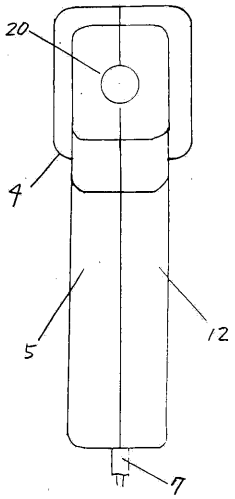
【図３】



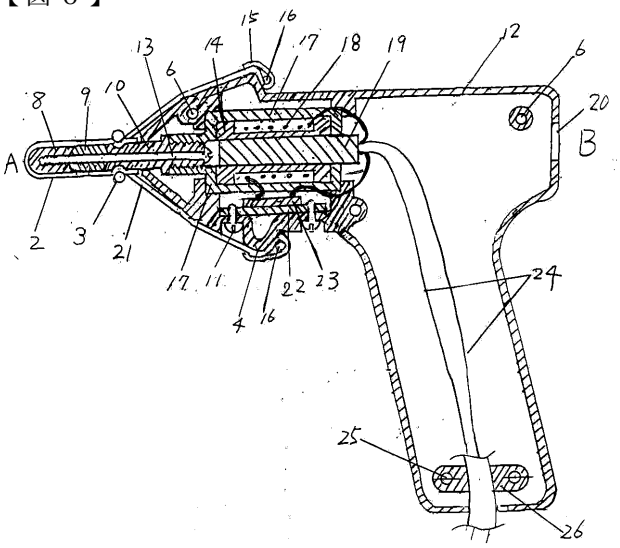
【図４】



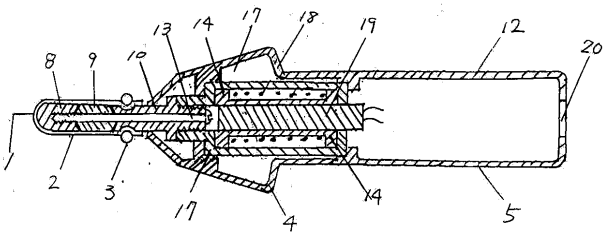
【図５】



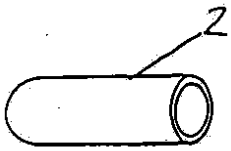
【図６】



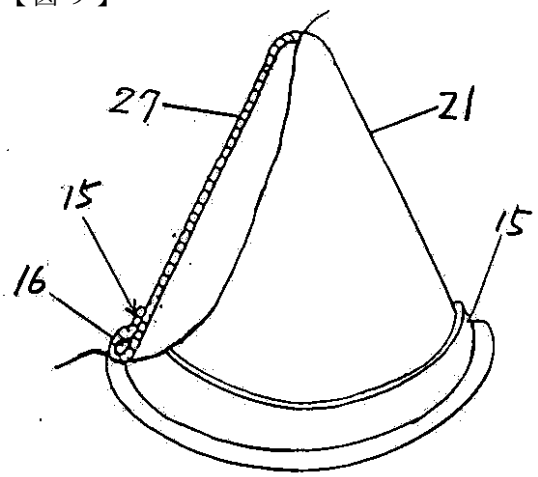
【図７】



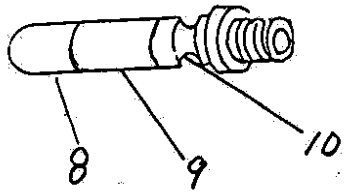
【図８】



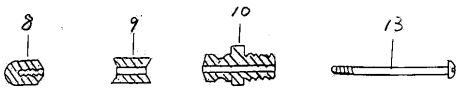
【図９】



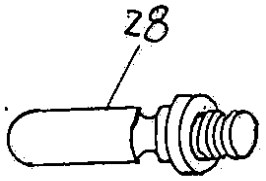
【図１０】



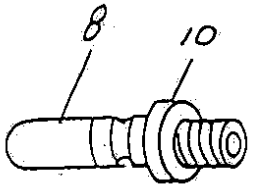
【図１１】



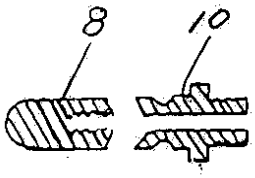
【図１２】



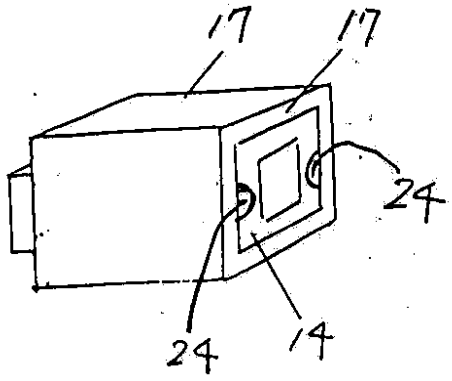
【図１３】



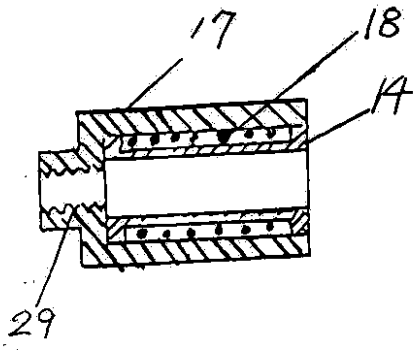
【図１４】



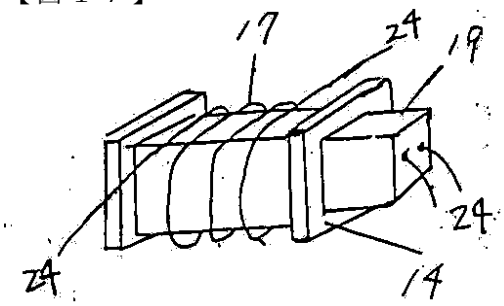
【図１５】



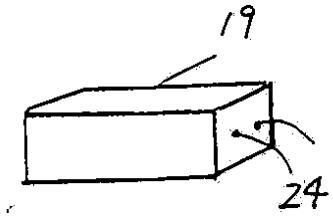
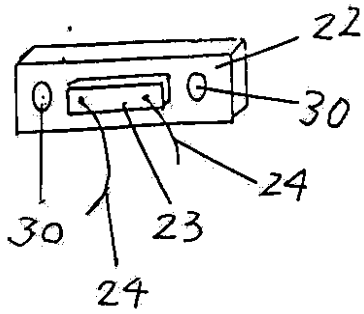
【図１６】



【図１７】



【図１８】



【図１９】